

---

# 結婚式前夜

霧野ミコト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

結婚式前夜

### 【Nコード】

N0011D

### 【作者名】

霧野ミコト

### 【あらすじ】

情性で生きてきた。情性で全てを終わらせた。だから、このまま、ずっとそうだと思ってた。それでいいと思っていた。だけど……

僕は、ビニール袋から、ビールを取り出すと、プルタブをあけ、一口含む。

特有の苦味が口に広がる。

そして、それと同時にアルコールが体中にまわり、体温が少し上昇する。

幾分温かくなってきたとは言え、まだまだ夜は肌寒い。だから、これぐらいがちょうどいい。

僕は、もう一口口に含むと、缶を置き、空を見上げる。都会の光に邪魔されながらも、星は鈍く輝いている。だけど、それでも、僕には十分だった。

いや、むしろ、それがぴったりだと思った。

田舎の綺麗な、それこそ澄み切った星空は、僕には不釣合いだ。汚れきったこの身をした僕には。

僕は、ここまで来るまでに、ずいぶん汚い事をした。

友を切り捨て、媚を売り、そして・・・

あらゆるものを騙して、ここまで来た。

別に、今の僕はえらくもなントもない。

それこそ、たんなるしがない会社員でしかない。

だけど・・・

本当なら、僕はその会社員にすらなれなかっただろう。

僕は、いつも手抜きで生きてきた。

何かをまじめに成し遂げたことなどなかった。

大学も、偽者の自分を担任の前で演じて見せて、それこそまじめな生徒のふりをして、推薦枠を手にした。

大学に行ってから、それは変わらない。

適当に、大学行って、気分が乗らないときは休んで、その後、適当に知り合いからノートを写させてもらっていた。

バイトもしなかった。

比較的裕福な家だから、その必要がなかったのもある。ただ、時間があると言うのに僕はしなかった。

ただただ、情性で続けた。

そして、就職もそう。

教授のコネで入れてもらった。

媚を売って、手に入れたものだった。

僕個人として、努力した事はなかった。

そう、一度として。

そして、今もそう。

なにも、変わらない。

僕は、情性で行き続け、運だけで、こうして生きている。

明日、僕は結婚する。

この結婚もまた、情性。

僕の妻となる人。

その人が敷いたレールの上を歩くだけ。

あらゆる準備は彼女がした。

告白の言葉も、プロポーズの言葉も。

何もかもが彼女が準備した。

すべてを彼女が準備したのだ。

僕は何もしてない。

努力なんて言葉、僕には必要ないから。

「ここにいたんだ」

不意に声がした。

もちろん、誰かはわかる。

僕の妻となる人だ。

「ああ。独身最後の日だからな。一人で宴会でもしようと思ってさ」

その彼女に対して、僕は、戯言で返す。

いつもいつも、そうだった。

僕は、彼女と真正面から向き合うことはなかった。

結婚にそんなもの、必要ないから。

結婚と恋愛は別物。

同じように考えてはいけない。

お互い、踏み込んではいけないものがある。

特に、夫婦となるなら。

「そう。私も一緒にいいかしら？」

彼女もそれをわかってているのだろう。

あえて何も言わず、そういうと僕の隣に腰掛ける。

それに対して、なんら文句言うことなくうなづくだけ。

身体の距離は近いけど、心は果てしなく遠い。

仮面夫婦。

きつと僕たちの関係を表すならば、そうなるだろう。

「うん。外で飲むビールも格別ねえ」

彼女は、隣に座り、僕が買い込んだビールのひとつを開けて飲むと、気持ちよさそうにそういった。

その姿は、僕がよく見知った彼女の姿だった。

僕の前で、彼女は常に奔放に振舞って見せる。

他の人間の前では、それこそ淑女然としているくせに。

まあ、そうせざるを得ない状況だからとも言えないでもないが。

彼女は奔放に振舞うことを許されていなかった。

常に、淑女でなくてはならなかった。

上流階級の人間として。

そう、僕の妻となる人は、いわゆるお嬢様というやつだ。

そして、僕は、その逆でどこにでもいるような一般庶民だった。

比較的裕福だとは言ったが、それはあくまでも庶民レベルの話でだ。

彼女たちのような上流階級の人間とは、雲泥の差がある。

だから、もちろん、問題も浮き上がった。

いくら、綺麗事を言ったところで、やはり身分の差がある。

特に向こう側は認めなかった。

僕と彼女の関係を。

まあ、僕自身も認めたくはなかったが。

もとより、彼女が無理やり、そうしただけで、僕の意味は何一つ含まれていなかった。

僕自身、何よりも面倒ごとは嫌いだから。

惰性で生きてきた。

だから、面倒ごとに巻き込まれることに慣れていないし、慣れたくもなかった。

だというのに、わざわざ、そんな中に飛び込むわけがない。

実際問題、今でも僕は、この結婚がなしになってもかまわない。

彼女がそれを望むのだったら、僕は喜んで、白紙に戻す。

いくら、なんとか彼女が説得したと言っても、順風満帆にいけるとは到底思えない。

確実に、大嵐を常に警戒しないといけなくなるだろう。

ただ、こうして、僕が彼女といえるのは、あくまでも、単なる責任でしかない。

僕と彼女は大人だ。

男と女の関係になった事はいくらでもある。

もちろん、責任と言ったが、子供ができたわけじゃない。

避妊に関しては、しっかりとしておいた。

欲しいわけでもないのに、作るわけにはいかない。

子供だって、つらいだろう。

本当の意味で、望まれて生まれきてた子供ではないだなんて。

だから、そんな事はしたくないから、きつちりとしていた。

僕が言いたい責任はそれではない。

僕は、彼女を抱いた。

それに対する責任だ。

もちろん、抱いたぐらいで責任を感じる必要性はない。

もし、そんなものを考えなければいけないのならば、いったいどれだけの夫婦ができるのだろうか？

それよりも、現代は、性に関しては、非常に問題意識が低い。

だから、小学生で、そういう関係になっている者だっている。

だというのに、もし、それを考えろと言うなれば、小学生にして結婚を考えろと言っているようなものだ。

はつきり言って、むちゃくちゃだ。

そんなふうに、考えさせるほうがおかしい。

だけど、僕自身は、そう考えていた。

はつきり言おう。

僕は、そういう行為に全くと言っていいほど興味がない。

むしろ、嫌悪感を抱いていた。

だから、必然的にそういう行為を、したいとは思わなかった。

それこそ、子供を作るとき以外には。

だけど、僕は、それを破ってしまった。

もちろん、僕が望んでいたわけではない。

彼女に押し倒された結果、そうなったわけだ。

けれど、経緯はどうであれ、僕が彼女を抱いたことには変わらない。

だから、それ相応の責任は取らないといけない。

そして、その結果として、これなのだ。

結婚なのだ。

僕は、彼女が望むように愛する。

別に嫌いではない。

むしろ、好きな部類に入る人だ。

愛する事に支障はない。

いくらかでも、愛せる自信はある。

「ねえ？貴方は何を見ているの？」

残っていたビールを一気に飲み干していると、横から彼女が問いかけてきた。

その声は、二人きりの時には珍しく、淑やかなものだった。

もしかすると、これが彼女の素なのかもしれない。

わけもなく、そう思った。

「何も見てないさ。俺には何も見えない。何も見ないで、見ようと

しないで、逃げてばかりいる」

そして、僕は、彼女の問いに対して答えた。  
普段なら、茶化すだろう。

だけど、なぜか、真摯な言葉で返していた。

「そう」

その答えを聞いた、彼女は声を落とす。

その真意はわからない。

ただ、芳しいものでないのは、間違いないだろう。

いつも思うが、彼女は常に僕の様子を見ている。

心配そうに僕の事を見ている。

それこそ、最初に会ったとき、彼女は初対面の僕に対して。

「何をそんなに苦しんでいるんですか？」

そうたずねてきたのだ。

箱入り娘のせいなのか、どうかは知らないが、ぶしつけな問いかけだった。

僕自身、あきれたものだった。

まあ、何度も話しているうちに、それは消えていったが。

うっとおしくはなったが。

それでも、嫌いにはなれなかった。

「さあ、そろそろ戻ろうか？主役二人がいつまでも、酒盛りして、当日二日酔いになってたら、元も子もないし」

僕は、飲み干した缶をすべて、ビニール袋につっこむと、立ち上がり、彼女に手を差し出す。

「う、うん」

彼女はその手を取り、立ち上がる。

そして、僕たちはそのまま夜道を歩く。

暗い暗い夜道。

途中にあったゴミ箱に、空き缶を捨てる。

そばには、噴水がある。

いまだ噴出し続ける水は、淡いライトの光を浴びて、きらきらと光



る。

「ねえ。貴方は、いつまで、昔の恋人を思い続けるの？いつまでも罪を背負い続けるの？」

それに見惚れていると、彼女が僕にまた、問いかけをして来た。

けれど、内容は先ほど以上に深いものではあったが。

「貴方の親友に聞いた。貴方ってば、どんなに口をすっぱくしても、茶化してばかりで本当の事を言ってくれないから」

彼女は、そういうと僕の隣まで歩み寄ると、僕と同じように噴水を眺める。

「ねえ、いつまで苦しんでいるつもりなの？いつまで、自分を傷つけるつもりなの？」

そして、そう続けた。

その言葉は、僕の胸に一つ一つ突き刺さった。

悲しいほど強く突き刺さった。

そう、僕は、今なお罪を背負い続けている。

そして、その罪と言うのは……

恋人を見殺しにした事だ。

僕は、一度、自分の恋人を見殺しにした。

心から愛していると伝える人だった。

だけど、僕は、そんな恋人を見殺しにした。

あれは、高校の時だった。

彼女の母親は、夫、つまり彼女の父親の浮気で、心がぼろぼろになっていた。

精神が不安定で、ヒステリックを起こしていた。

僕もそれを知っていた。

彼女がおびえていることも。

もちろん、僕も心配で、相談には乗っていた。

誰よりも愛しい人だから。

だけど、僕の対応は真摯なものではなかった。

簡単に考えすぎていたのだ。

彼女の母親がどんどん追い込まれて行き、彼女はどんどんおびえていった。

僕に助けを求めて、僕の家逃げさせてくれと言った事もあった。だけど、僕は、それを・・・

『だめだよ。もう、お母さんには、お前しかいないんだから、ここで、お前までいなくなったら、お母さん本当に一人になってしまうだろう？』

断り、拳句の果てに、諭そうとしたのだ。

結局、彼女は、僕の言った事を聞いて、そのまま家にいた。そして・・・

その日、彼女の母親に殺された。

もう、彼女の母親は娘の事がわからなくなっていた。

それどころか、彼女の事を、夫の愛人だと勘違いしたのだ。

そして、狂った彼女の母親は、泣いてとめようとする彼女をめったざしにした。

僕が、彼女の電話を聞いて、彼女の家に着いたときは、すでに彼女は虫の息だった。

そして、彼女は体中を血だらけにして、恨みがましい目で、僕を見て『うそつき』

そう言つて、死んだ。

それは、あまりにもグロテスクな世界だった。

子供が目にするには、あまりにも生臭い世界だった。

まだまだ、青臭い子供が見るには、あまりにも残酷だった。

だから僕も発狂した。

狂ったように笑い続け、彼女の母親は殴り倒した。

何もかもが壊れてしまった。

自分のせいで。

自分の浅慮のせいで。

友はみな、僕に同情してくれた。

僕に慰めの言葉ばかりかけてくれた。

誰一人として、僕を悪く言うものはいなかった。  
誰も僕に罰を与えてくれなかった。

だから・・・

だから、僕は自分自身で罪を科した。

何も望まないようにした。

何も望めないようにした。

今の僕は何も望めない。

いまさらだから、はつきり言おう。

僕は、妻となる彼女の事を愛している。

深く深く愛している。

でも、だからこそ、僕は望まない。

望めない。

それが、罰だから。

恋人を守れなかったおろかな男への罰だから。

「貴方がいまだに昔の恋人の事を引きずっているのは、わかってる。私はそれを分かった上で、付き合っていたわけだから。でも、これ以上は無理。もうこれ以上、貴方がぼろぼろになる姿は見えていたくない。確かに、貴方は罰を受けるべき罪を犯した。だけど、それから、もう何年が立つと思うの？10年よ。10年も経ったというのよ。もう、これ以上、苦しむ必要はない。貴方は許されていいのよ。貴方が自分に罰を科したなら、私がその罰を解く。貴方がどれほどまで、苦しんで、傷ついてきたのかは、知っているから。だから、もう、許してあげよう？」

彼女は、そういうと、僕を抱きしめる。

女性にしては、やや高めの身長。

けれど、平均的男性の身長である僕よりかは、小さく、その姿はやはりどこかこっけいに見える。

だけど、僕には、それがそうとは思えなかった。

むしろ、包み込まれているように錯覚してしまった。

いや、それは錯覚なんかではないのだろう。

現実的に、彼女は僕の事を・・・

僕の心を包み込んでくれる。

僕の罪を許すかのように。

そうだ。

何事にも、終わりはくる。

こんなふうに罪を背負い続ける日も終わらなくちゃいけないんだ。

僕が犯した罪は、一生消えないだろう。

だけど、それでも、許される時が、来てもいい。

これは、他の誰でもない僕が背負った罪。

だから、他の誰でもない僕が許さなくてはいけない罪。

これが見殺しにしてしまった彼女が刻み付けたものなら、違ったかもしれない。

だけど、彼女は、何も残さなかった。

ただ

『うそつき』

その言葉を残しただけ。

自分勝手だけど、もう疲れた。

もう、彼女はどこにもいない。

どんなに背負ったところで、何も変わらない。

ならば、いいだろう。

勝手に許しても。

「そうだね。許してやるか。いつまでも、どこまでも、何も変わらない。なら、やめてしまったほうがいいか。もとより、俺は面倒な事は嫌いだからさ」

そして、僕は彼女の言葉に答えた。

それを聞いた彼女は抱きしめる力を強くした。

僕は、それを享受する。

なんだか、それがおかしい。

普通なら、男女逆だと思う。

だけど・・・

それも、いいだろう。

彼女は僕の前でだけ奔放に振舞う。

なら、僕だって、彼女の前だけ、甘えてみるのもいいだろう。  
それぐらいありだろう。

(後書き)

まあ、落ちが面倒になってご都合主義になった奴ですww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0011d/>

---

結婚式前夜

2011年1月29日14時44分発行